

第4回生田緑地マネジメント会議準備会 議事録

開催日時 平成24年3月16日(金) 18時30分～21時00分

開催場所 多摩区役所6階会議室

出席者 (別紙)

議題 運営ルール作成に向けて
・マネジメント会議のあり方 等 (意見交換)

開会

(小川コーディネーター) 前回に引き続き、マネジメント会議の在り方について多くの方から意見をいただき、議論をしたいと思う。色々な方面の方々から、色々なご意見を頂きたいと思う。前回の準備会で、マネジメント会議を唯一の会議にしていこうという意見もあった。事務局よりイメージについて説明していただき、それについて議論して頂きたい。

配付資料確認 (事務局)

(事務局：資料説明) (省略)

(小川コーディネーター) 前回に引き続き、マネジメント会議の在り方について議論したい。

(会員) マナー啓発をするにあたり、腕章を用意する、チラシを配るという事は、資金やマンパワーがかかたりする事だが、すでにイメージがあるのか。あるのであれば共有していただきたい。腕章を用意するにしても、デザインや権利の件など、マナーの関係についてはコンスタントに見張っていなければならないため、かなりマンパワーが必要になる。町内会の防犯パトロールも人材が足りない程忙しい中で、市民団体や行政の誰が行うのかといった部分の具体的なイメージがつかないので、これでうまくいくのか判断ができない。

(会員) 非常に幅広い活動をしている自然調査団や雑木林を育てる会などは、マネジメント会議の関わる範囲の3つの分類の中でどのようになっているのかを具体的に説明していただきたい。各団体の活動はこの中のどの部分に該当すると考えているのか。

(会員) お二人の意見は行政の資料に対する質問であって、今は自分達でどうしていくかを話し合っていかなければならない。対行政でやっているわけではなく、自分達でいかにマネジメント会議をつくっていくかを話す場である。

自分達のような生田緑地の生態に手を加えている団体と、商店街や自治会のように来てイベントを楽しんだりする団体は、実際には違う。また、植生管理協議会のように、そこにある自然をどのように残していこうかといった会議があるが、それぞれによって活動がまったく違う。マネジメント会議はそういった異なる活動をしている団体と共通した認識を持つというためにある会議だと思う。逆に言えば、マネジメント会議は大勢の人が意見を交換するためになかなか決まらないので、先に課題解決するような会議を設け、マネジメント会議にのせていくようなやり方をしないとまとまらないと思う。

(小川コーディネーター) 今日は多くの方から意見を頂きたいし、決して行政対市民という場ではない。議論がしやすいように、一例としてイメージを出させていただいた。これで全て解決しようとしているわけではない。

(会員) 参加されている方に、「うちができる」という団体があればイメージが出来るし、そうでなければ難しいというあたりを、色々な団体に伺いたい。

(小川コーディネーター) この図では、様々なステークホルダーがいる。活動団体、企業や大学、商店街、行政といったものがあるが、その方々が全体会に臨むのではなく、中間領域が必要であるという意見だと思う。

(会員) 管理運営協議会の事務局をやってきた。その中で、色々な団体を取り纏めて話し合い、マナーの啓発などやってきているが、自分の中で整理されていない。植生管理協議会の取り組みも、どういった形で持続して実績を評価していくのかもなかなか分からない。植生管理協議会と管理運営協議会だけではなく、地域団体や大学企業など地域を巻き込んでやっていこうという流れになり、マネジメント会議ができているのかと思っている。生田緑地における散策路や中央広場などを整備する中で、公共施設における市民協働はどういったものかという部分はたえず意識しており、お互いが認識しなければならない。やはり行政が市民目線になるという事と、生田緑地は公共施設であり、公共の場という事をしっかり意識しなければならない。公共の場で活動するには最低限のルールがある。行政の立場として、都市公園法や川崎市公園条例といったものがあり、そういったもので成り立っている。基本的に公共施設である公園緑地というのは公開制の高い施設であるという事を認識しなければならない。生田緑地には自然環境が豊かで、多摩丘陵の一郭にあるため、保護区域や保全区域、利用区域がある中で、1つのルールを作っていかなければならないのかと思う。そうすると行政と市民活動団体との信頼関係を作っていく場が必要である。またこれまでの実績として植生管理協議会や管理運営協議会が起ち上がって来たのではないと思う。そういった中で、生田緑地の特性に応じて、色々な活動や情報共有をしてきた事により、一定の成果が上がっているのは事実である。ただし、行政の考えとして、時代の流れに沿って、藤子ミュージアムがオープンしたり、行政内の組織が大きく変わり、生田緑地を管理運営する考え方も変わってきた。更に、向ヶ丘遊園や登戸のまちづくりという1つの中に生田緑地が大きく位置付けられてきた。こういった大きな節目を迎えていると思っている。そうした中で生田緑地

ビジョンが平成 22 年度に策定され、その中に協働のプラットフォームの設置が位置づけられ、協議会の方々とも議論をしながら、色々な事を消化していくのがマネジメント会議なのかと思う。地域と一体となった流れの中で動いている部分があり、プラスアルファとして地域というものがどんどん入ってきているので、そこをまずしっかり認識していただきながら作っていくことが大事だと思う。できるだけマネジメント会議が透明性のある参加のしやすいものであればいいと思う。

(会員) 今までの議論を聞いていると、抽象的な議論ばかりで具体的な議論がなく、煮詰まらない。そういう意味であえて、管理・運営・整備の中で、各団体の活動をどのように考えているのかを聞いた。私の認識では、運営の一部としか考えていない。実際には運営に参画するのではなく、幾つかの団体は管理・整備にも関与している。そのあたりを含めて担当者の考えを聞きたい。

(事務局) マネジメント会議の関わる範囲としては、点線の中をイメージしていただきたい。各種活動の部分には各団体の活動も入ってくる。また、整備については整備方針や計画などを作る場合はマネジメント会議の中で意見交換をすることを想定している。管理についても、里山環境の保全管理や植生管理計画やマナーづくりなどもマネジメント会議の関わる範囲として、全体で行っていきと思っている。

(会員) マネジメント会議について分からない部分も多いが、基本的には管理運営協議会の延長線上にあると思っている。そこで不足するのは、植生管理協議会が素晴らしい活動をやっているのに、反映されていなかったという部分。それがプラスされたらすごくいいと思う。また、生田緑地は、首都圏にありながら自然も多い日本でも珍しく素晴らしい緑地であると思う。川崎市や地元にとっても大事な場所であるはずなのに、地元では生田緑地についての認識がない。地元と一緒にになれる共通認識が必要だと思っている。また、自然の大切さについて地域で共有されているのかが心配。マネジメント会議が出来るにあたっては、そこを中心にやってほしいという思いがある。

(小川コーディネーター) マネジメント会議の在り方の中で、一番大きな点は、いままで大きく 2 つの協議会があった。その協議会の枠組みを外し、地域を巻き込んで、生田緑地をみんなの物として活用し、共有地としていきたいというのがベースの考え方であると思う。

(会員) 生田緑地の魅力は自然環境であり、保全し、保護しなければならない。そう言った自然環境についてお互いしっかりと認識した上で、将来に持続されていく事を大前提として、保全と利用を進めていくという共有認識をもったほうがよい。色々な方の話を聞いて、生田緑地の根底にある自然環境を守り、保護、保全、利活用について議論し、ゾーニングができたところで利用のマナーを決めればよい。まず、根底で共有できることを共有したほうがよい。

(会員) 生田緑地の自然が宝であるということ共有するという話だが、共有化する事をここで決めるのではなく、本来はマネジメント会議のルールを作る時に、共有化するこ

とを大前提とするルールにするのがマネジメント会議の最初の部分になるのではないかと。その部分がスタートラインにならなければならないが、活動されている方からすると個別の活動がどうなるのかという話になり、色々な団体に参加いただく事で課題が出る。そういった課題を共有しようということがルールになると思う。この会議で規約になることを共有化するということが最初にあり、次にそれを解決するルールがあり、はじめて会議の在り方が分かるのではないかと。生田は大事とあるが、活動することが大事であるという意見の人もある。そういう意味では、最初に理念的なものがどこにあるのかを決めながらやるのが大事である。マナーの問題でビラを配ろうという話があったが、ビラを配る計画を立てたが、課題が出た場合に議論していくのが分科会であって、それによって解決されるのではないかと。そういう基本的なところを文字として見えるようにすることがルールではないかと個人的に思う。皆さんがどう思うかをお聞きしたい。

(会員) 生田緑地ゴルフ場で約10億円の収入があるが、その一部を一般会計に繰り入れて、生田緑地の管理運営を行っている。岡本太郎美術館と日本民家園、新しくなる青少年会館などの収入を増やすために、どうやって来場者を増やそうかという考え方が1つある。川崎市のデータを見ると、4割以上の方が生田緑地に行ったことがなく、知らないというのに多額の税金が投与されているのは異常な状態だと思う。ここを活用する人と管理保護する団体の人が、公園は公共のものであるという認識の上に立ち、何人の方が来てもらえるのか、将来に向けて管理する為に有料化にするといった議論をしないといけない。マネジメント会議の在り方については、この会議はどういった立場なのかということよりも、知恵出しの場であると思う。商工業者の立場から言えば、もっと活用しながら、色々な人たちが意見を出し、初めて色々なものが出てくるのではないかと。思う。

(小川コーディネーター) 今、お金からの意見が出た。税金を相当投入しながら回収が出来ていない。来場者をどう増やしていくかというのは生田緑地が抱えている課題。それに対し、保全を重視したいというところと議論し、解決していくのがマネジメント会議の大事な点ではないかということである。他に意見はあるか。

(会員) マネジメント会議の在り方、イメージについて、私としては疑問。生田緑地ビジョン策定委員会の中でマネジメント会議の話が出たときに、協働のプラットフォームというということが書かれていた。協働のプラットフォームというのは非常に魅力的で半分賛成だが、ここに書かれているイメージには協働のプラットフォームは描かれていない気がする。活動している団体としては、各会員の団体がやっていることを含めて協議会がやっているような事になっている。そうすると全団体がやっている事が、すべてマネジメント会議が実践しているというようになっていっているように見られる。協働のプラットフォームであれば、実践は全て外に出して色々なソケットがついてくるという形にしておけば良い。色々な活動が、全体の目指しているものに向かってうまく機能するよう、色々な団体を結びつけたり、新たに団体をつくったりする。その機能を外に作り、

うまく動いていくようにすればよい。マネジメント会議とは、実践する団体ではなく、協議に徹してもらいたいと思う。これだけのメンバーが集まり、会議も実践も行うとした場合、どのように運営していくのかが気になる。また、1番肝心なエンジンになる部分が入っていない。エンジンがないと会議自体をマネジメントしていけない。どのように考えているのか。

(小川コーディネーター) マネジメント会議は色々な主体があり、それらを結びつけたり、協議の中で新たな主体が生まれたりする場であって、マネジメント会議自体が何か実践をすることまで抱えないほうがよいということか。

(会員) その方がよいと思う。

(小川コーディネーター) あくまでも色々な活動が出会ったり結びついたり、生まれる場であるということか。

(会員) 積極的にそのような結びつきを作っていく、今まで関わってこなかった団体を結びつける事で、全体が非常に多様で活発で、魅力的な活動が展開されると思う。

(小川コーディネーター) 例えば、商店街の方と自然団体の方がプラットフォームで出会い結びつき、商店街の中で保護の運動を支えようとする活動がマネジメント会議外で行われるということか。

(会員) それが協働のプラットフォームでないかと思う。

(小川コーディネーター) もう1つが、全体のエンジンとなるものが図では分からないと言うことである。例えば、エンジンはどのようなイメージをもっているか。

(会員) 少人数で生田緑地を何とかしたいと思っている人たちや、様々な立場の人たちが集まったとき、事務局がないと情報を共有したり繋いだりといったことができないと思う。指定管理者や1企業ではできないと思う。生田緑地について、詳しく知っている人たちが入っていないと変な方向へ進む可能性があるし、全体会議で会議すべき課題を出すのもある程度分かっている人間がいないと難しいのではないかと思う。色々な立場を代表して時間を使ってもらえる人がいるかどうかということである。

(小川コーディネーター) 会員が毎回全員集まるのは不可能な為、よりコミットメントを取れる人たちが集まり、少人数の会議をエンジンとして動かそうということだと思う。

(会員) 商業の面から見ると、多摩区の最大の核・拠点が必要である。その点で、生田緑地は申し分のない集客のポイントになる。商店会も緑地に近い所と離れている所があり、それぞれ温度差はあるが、核を作ってそこに人を集め、その施設、または緑地のコントロールがうまくいけば、それがまた良い方面の情報発信源になる。そのためにも、マネジメント会議のように各団体から意見を吸い上げる情報収集力、また施設整備、財政面に関して各団体から出席していただき、話し合える場があつてこそ、地域の情報が密になり、地域の活性化の源となる的確な情報発信の場になると思う。各団体の情報の吸い上げをうまくコントロールするような会議の場という位置付けでお話を進めていただくとありがたいと思う。

(小川コーディネーター) 生田緑地は色々な商店会と距離感があるが、集客の核となる拠点であることは間違いなく、関わる人たちが密な情報交換を行い、発信していく事になるだろうということである。

(会員) 22年度に出来たビジョンの中で、今後生田緑地は効率的な管理運営に向けましようという事が決められて、各施設の活動域を超え、横断的、多目的に連携できる管理や仕組みの導入を求められますよという話がある。これを踏まえると、色々な団体が色々な活動をしているが、今回はみんなに話を出してもらい、活動を分かってもらい、同じ活動は1つにまとめればよいと思う。

(会員) マネジメント会議は一体何をするとところなのかが、色々議論していると分からなくなってくる。私なりに理解しているのは、図で言うと左の5つの構成の方が集まるのがマネジメント会議である。そこで何をするのかというのは、承認と評価。外に出ている団体が何かしたいという時にマネジメント会議で承認をしたり、結果についての評価をするのが会議の目的ではないか。実際はマネジメント会議の外にいる人たちが実際の活動をすればよいのではないか。実際の活動はマネジメント会議の外にある。3つの図に書かれている活動は、マネジメント会議の外にあり、中にもあるかもしれないが、殆どは承認と評価で実際の活動は外にあると理解している。例えば木を伐採する時、マネジメント会議で承認をする。そういう事をする場ではないかと思う。

(小川コーディネーター) マネジメント会議が承認するという事は、ものさしを持っているということか。

(会員) そうである。そのためには専門家が構成メンバーとして入っている。

(小川コーディネーター) ようやくマネジメント会議の在り方について各方面から意見が出され、会議の輪郭が見えてきた。他にあるか。

(会員) すごく良い議論になってきていると思う。単に、みなさんが言っていることの軸はずれておらず、言っていることは、皆さん共通していると思う。マネジメント会議は、自然を大切にすることを基本理念におきつつ活用し、市民で共有できるようにするために、会員になっている色々な団体の力を見出し、引き出してつなぎ合わせて活動を承認する。承認したら、それが出来そうな団体が実施をしていく。つなぎ合わせる為の場がマネジメント会議であるというのが、皆さんの意見に共通する部分なのかと思う。その中で、意見を吸い上げて行動に移していくとなると、エンジンになることが非常に大事になる。マナー啓発のように動く人がいないような事は、やる気にさせるエンジン役の人が必要である。モリコロパークだと、組織図には書かれていなかったが、県の職員がエンジンになり、会議以外の場でみんなの力を引き出し、動かしていた。そう言った立場を、私達の場合は位置付けた方がいいのではないか。生田緑地は公共施設なので、公共の立場である川崎市が責任をもってエンジンのような役割をしていただくのがよいのではないか。予算が必要な場合も財務局にお願いできるくらいの力をもってやる。また色々な商店街や自治体に足繁く通い、実際に動けるようにやれるような事をこの組織図に書いておくと動きそうに思う。ま

た、先程の生田緑地の来場者数が非常に少ないということについては、生田緑地ビジョン検討会議の時に、博物館専門の先生が来場者は非常に多いと言っていた。そういった部分で民間企業とは違うと認識した上で、議論いただければと思う。

(小川コーディネーター) エンジンは何処にあって、それは何なのかというところについて意見をいただいた。組織を動かすにはエンジンが必要であると思うし、今回のマネジメント会議では今までなかった新しいエンジンへの挑戦かもしれない。そのあたりのエンジンとは動く人たちという理解でよいか。

(会員) 指定管理者が入ってどうのという話があるが、わたしの理解では、掃除を効率よくする、広報を効率よくするなど、博物館同士の企画の連携をうまくするのが指定管理者であって、マネジメント会議で出てきている内容を委託する先の指定管理者ではない。

(小川コーディネーター) マネジメント会議の会員が担っていくことではあるが、最終的には誰が担っていけるのかということ。特になければ、マネジメント会議の在り方に対する思いを皆さんで共有したいと思っているので、順番に一言ずつ。

(会員) 表の左に生田緑地の担い手として自然の為に活動すると書かれていて、活動団体や大学や企業や商店会、行政となっている。その中で「人と自然」と書かれてはいるが、漠然としている。川崎市のものであり、市民や近隣地域に対してということが大きな前提になってくると思うが、私が今まで生田緑地と関わり、その都度考えたことは、熱心に活動しており、外からも生田緑地というものに対して期待も大きいですが、どう見ても「おらが森」、「おらが緑」というスタイルになっている。確かに川崎市のものであるが、これを突き進めていくと、そういう感覚が強くなっていく。その時に、生田緑地を多くの人に知ってもらおうとすると、我々の活動や考え方はどこにおけば生きるのかと思う。川崎市だとか市民だとか活動団体ということは、自分の為ではなく、来てくれる人のためであり、来て欲しいと思う人の為にやるということである。預かっている地域の観念を持って考えてみると、意外とスムーズに考えが進んできた経験がある。そのようにスタンスを変えて、今までのような議論をすると違ったものが生まれたり、あるものが消えたり、ある報告が明確になったりするのではないかと感じている。

(小川コーディネーター) 「担い手として、みんなのために活動」とあるところを、「来て欲しいひと」、あるいは「来てくれるひと」の為に、いわゆるお客様視点に立つということだと思う。「人と自然」と書いてあるのは、対象者は来てくれるお客様であると同時に、自然もまさに対象であると言う意味であると思う。

(会員) 先ほどから話にでていたエンジンは気になっていた。私なりの理解では、指定管理者がエンジンになっていくと思っていた。しかし、生田緑地は公共のものであるから行政の方がエンジンになっていった方がいいのかなと思う。実際に、エンジンとはマネジメント会議が動いてから定まっていくのか、それとも既にある程度決まっていることなのか気になる。

(小川コーディネーター) たぶん決まってないと思う。

(会員) 植生管理協議会で決めたことをやるということで活動しているが、そのことを全体会でやるというのは、私は信じられない。この場で決めるのは不可能だと思う。

(会員) 生田緑地の目標の共通認識がはっきしていない。だから各団体で色々な意見がでている。各団体さんが考え方を一度リセットし、共通認識で生田緑地をどうするかを最初に考え、その中でどうするか意見を述べていただいた上で、それをまとめあげるのがマネジメント会議の位置づけだと思う。

(会員) マネジメント会議の理念は、生田緑地ビジョンを実現するために、プラットフォームを創ろうとなった時に決まったことだと思う。そのために何をするかを、マネジメント会議の中で話し合っていかなければならない。もう一つ、指定管理者がエンジンということに驚いた。指定管理者をエンジンにしないために、市民が主役になるために、この会議があると思っている。

(会員) 先ほど、左側のところがマネジメント会議であるという話をした件で一言。実際活動する人たちは外にいて、「何かするときにはあそこで承認をとれば良い」と言ったこと背景には、生田緑地管理運営協議会で、あることをやりたいといったが、他の団体から承認されず、我々のやろうとしたことが潰れてしまったことがある。色々なみなさんが集まっているところで承認がとれば、実際活動できると思い発言した。

(会員) 民家園は、お金にはならないが、子供や孫に本物のそのままの家を守り、文化を守りきちんと伝えている。また、癒しの場を提供する等の役割を担っていると自負している。現在、生田緑地サマーミュージアムの実行委員会の総務の仕事をしており、エンジンの一端を担っているが、大変である。しかし、生田緑地の魅力を発信したいと思っている。生田緑地には、一言では言えない多様な魅力がある。活用したい人にはそういう場も提供してくれるし、昆虫の新種がでてくるような貴重な場所もあると聞いている。価値観の違う色々な市民の方が楽しめる場が生田緑地だと思う。そういうことを考えると、生田緑地の将来像、目標は一つではなく、色々な面があると思う。その中で何をエンジンにするか、理想像、概念を協議する場ではなく、具体的に何かを解決していくことによって理念が付いてくると思う。成果が小さくてもいいから具体的な事をやらないと長く続かないと思う。

(会員) 実際木を切るときの話など、細かいところを詰めなければいけないと考えている。今、スクリーンに映っているものが、サイクルのイメージなのかと思っている。例えば、新しくできた中央広場の芝生はデリケートなので、店舗を入れないこととしており、今のところサマーミュージアムや区民際のときには同意してもらっている。今は行政からルールとして説明しているが、例えば、課題として芝生が傷んでしまう、犬のマナーが悪いといった内容を情報共有するのが2つ目の箱であり、そして3つ目の実践ところで実際のルールを決めましょうという形になると理解している。

もう一つ、行政として、今の図では、「単にみなさんの意見からダメです」と言わなければならないと思うが、最終的な決裁権は行政にあり、非常に悩むことになる。

(会員) 人が大変多い市街地にこの緑地が残されていることは、大変価値があること。公

園というのは、市民のもの、市民の財産、市民がみんな楽しむところであると思うし、財産だから価値をしっかりと認識しなければいけない。緑地が沢山あり、すばらしい民家園、岡本太郎美術館があり、他地域に対して誇れるものがある。それぞれの価値をしっかりと生かし、それぞれ価値観をもった市民がその価値観の基に利用できる形を創っていくことが一番の目的である。また、この公園を色々な団体が色々な活動しているのは、すごく価値があることで、まず色々な団体が利用できるルールをきちんと作る必要があると思う。樹木が沢山残っているのが、一つの価値であり、その自然をどうするかなど、活動を担保にした形でルール作りをすることが大切である。また、市民の方々にも利用出来るような大まかなルールをつくり、その後で運営の特殊例を考えていくのがマネジメント会議であったら良いと思う。色々な団体の活動を担保する必要がある。それができなければ、生田緑地の価値はなくなると思う。

(小川コーディネーター) まずは共有するナレッジ、ルールをみんなでもってということかと思う。

(会員) 毎年、生田緑地でサマーミュージアムをやっているが、そのときには、自然をいかに守るかを第1に考えている。マネジメント会議の在り方という事であるが、私の考えとしては、現在ある管理運営協議会が発展的に全体会議に吸収されて、実践舞台としてはプロジェクトや部会として存在を位置づけ、この全体会を構成するということであり、現在ある各種団体の実践に支えられて、この全体会を盛り上げていくのではないかと考えている。従来の管理運営協議会であった「会則の目的」を、この全体会に生かしていくのがベースになると思う。

(会員) 個人的な考えになるが、大学は教員と学生という人的資源が全てといったところがあるが、教員という立場だと、教員の研究がどのように地域に還元していけるかという観点、学生については、教育という観点が、結果的に地域に出て行き、どのように社会貢献できるか。そういった観점에서、生田緑地マネジメント会議に大学がどう関わっていけるかを考えている。核ないしエンジンとなるところの方向性が出たときに、それを大学に持ち帰り、教授、学生にどう絡めていけるかを考えることになると思う。

(会員) 活動団体として色々実践しているが、作業や活動自身は楽しんでやることを原則としているし、ボランティア団体は強制でやる場所ではないと考える。その中で色々な事を聞きながら、生田緑地が他の公園と機能的なことで全く違うことが実感として分かってきた。公共の公園なので、採算性は優先すべきでない。来園者が楽しいという感想をもてるようにすべき。生田緑地の良さを地域の方がよく理解されてないと聞いたが、よそからみると価値観が高いと思う。そういうことに自信をもち、保全と利用は相反するようだが共通のことも多くあるので共存していかなければならない。その辺がマネジメント会議での一番大事な事だと思う。私が感じるのは、保全、今のある良さを伸ばしていくのが行政ではないかと思う。採算的な事は民間でやってもらえばよく、行政は行政の立場をしっかりとっていただきたいと思う。

(会員) 実践舞台はプロジェクトチームであり、日常活動を数十年続けている。管理運営協議会のルール化された中で動いてきているので、今後も投身してほしい。その人達が核になってプロジェクトのエンジンとして動いてほしい。我々はNPO法人としてイベント的な行事(プロジェクト)を行っているが、大学生、企業、商店街のなかから、「こういうことをやりたい」という希望がきっと出てくると思う。それをプロジェクトして掴んでルール化していくことが必要ではないかと思う。最後に、色々な人の意見がでたが、それをルール化してまとめていくことがこの会議の役割ではないかと思う。

(会員) 植生管理協議会では、異なる立場の団体の調整を行っている。その背景にあるのが植生管理計画であり、様々な場所に市民集まり、その場所の自然を見ながら考えてつくってきた。1本の木を切ると決めるためには、計画を定め、異なる立場の人と調整をしなければならず、大変なことである。新しくルールを作れば良いという事について、今まで市民が中心になって作ってきた計画(植生管理計画)が、新たなマネジメント会議ができたらまた作り直すということでは、せっかく生きてこられるようになった生き物が生きていけなくなってしまう。その点も配慮していただきたい。植生管理は楽しいものであり、沢山の山の人たちと分かち合っていていく必要があるため、市民が参加できるシステムをつかって活動している。そして、大事なことは植生管理とは生田緑地の自然全体に対して責任をもつ活動であるということ。手で触れることができる簡単なものが植生なので、植生を主に扱っていると理解していただきたい。

(会員) 生田緑地のマネジメント会議とは、生田緑地をどういう方向にもっていくのかという会議だと思う。今まで各団体が何十年とかけてやられてきた事を新たに集約して、良いところ、悪いところを個々に話を聞き、生田緑地を新しく生まれ変わらせるのか、従来通りでいくのか、そこを話し合う場だと感じている。実際、市民で知らない方がいるなかで、これから先、知名度を上げていくには、利益性を生んでいかなければならないのか、従来通り目に見えないところで貢献する緑地とするのかを考えていかななくてはならないのがこの会議ではないかと思う。また、準備段階において疑問に思うことがある。各意見を集約するのになぜ、1年半で形を作ろうとするのか。みなさんが何十年も活動してきて、それを1年半で集約し、準備段階でマネジメント会議を立ち上げることができるのか。しかも2ヶ月に1回の会議で、なぜ、来年の3月に立ち上げなければならないのか疑問である。もう1点、個人的な意見であるが、生田緑地は川崎市のものであり、また市民のものでもある。その中で、川崎市がどのような方向に持っていきたいのか全くみえない。管理と整備を一番担っている川崎市がどういう方向に持っていきたいかの意見や形があっても良いと思う。その中で、皆さんと話し合い、見えてくることもあると思う。

(会員) 生田の魅力を発信すると言うことは、本当の目的は多くの方にお越し頂いたり、知っていただくことではないかと思うが、みなさんその目的を持っていらっしゃるのかがまだ分からないところ。今は民間企業という立場で、参加している以上、どう協力できるかということはこの会議を通じて知っていきたいと思っている。

(会員) 多くの団体が生田緑地をフィールドに活動したり、緑地についての活発な意見や個々のしっかりとした価値感をもって生田緑地のことを話せることが、現時点で大きな価値であると感じる。まずは、しかるべき緑が保存されていることが生田緑地の魅力になると思うが、緑地には文教施設があり、文化に親しめる土地であり、ゴルフ場のようにお金を稼げる緑地があったり、ただ単に憩える場所だけでなく、様々な活用の仕方があるのが大きな価値でもある。それを様々な立場で共通の価値観に基づいて活動していくのは大変難しいと思う。しかし、文化行政はお金に換えられない価値があると思う。それだけに甘んじず、何かと連携して集客を増やし、税金の負担を減らす努力をし、文化を発信しつつ、連携していくことで良いことができると思う。マネジメント会議で新しい試みが生まれたり、個々がもっている課題がみんなで分かち合えて、話し合える場となれば、それだけで価値がある。みなさんに新しいこと、やりたいことが出たときに、ここは配慮しよう、考慮しようというきっかけになっただけでも、会議としては価値があるし、こういうことをやってみようということが新しく生まれるのも、マネジメント会議でできたら素晴らしいことだと思う。

(会員) 我々の施設は、川崎市の教育施設・自然科学の博物館であり、教育普及事業のなかで、生田緑地の自然を多くの方に知って頂き、来た方には疑問に答え、興味を深めてもらう施設として役立てれば良いと思っている。予算の話が出たが、博物館ということで派手なことはできないが、公共施設・教育施設としての役割を担いながらも活動予算としての歳入を上げていかなければならない。私たちの施設は世界最新鋭のプラネタリウムを導入するが、これにより多くの方がみえ、生田緑地について知っていただき、そして地域にお金を落として頂く。博物館といえども、行政施設の一つとしてみなさんに、そしてこの会議の中でご利用いただければと思う。

(会員) マネジメント会議ができるというのは素晴らしいこと。マネジメント会議でこれだけのメンバーで議論ができるということは、意義があり、素晴らしい。私たちの施設でも、さらに多くの人に来ていただくために、こういう場でいろいろな意見をいただき、活動に反映するという意味で、この場に出席することは大切だと思っている。生田緑地全体の様々な問題をこの場で解決していくという意味でも意義があると思う。

(会員) 現実的に会議が何の役に立つか考えている。雑木林勉強会で指定管理とボランティア、行政の関係を見てきた。みんな手探りでやっている。先ほど、スケジュールの話が出たが、この会議のスケジュールは指定管理のスケジュールにのってやっているとは私は理解している。私は、指定管理は清掃業務などの延長としては考えていない。ビジターセンターと西口サテライトで 3,000 万円規模の予算があるわけだから、どんな委託内容になるか非常に興味があるし、どういうところがジョイントを組んで決まるのかについても非常に興味がある。僕らが指定管理とどう対応していくかを考えると、そのまま流れていくのかと個人的には思っている。どんなに意見が尊重されると言われても、どうしてもそうやっていこうと思う。ある意味、対抗していく部分、意見を押し通す部分が大切だと思

っている。個々の団体が、指定管理に対してどうしていくかということを決めていく、具体化していくところがこの会議だと思っている。しかし、初めは指定管理に対して対抗していくものだと思っていたが、そうではなく、指定管理にどのように食い込んでいくのかと思うようになってきた。活動の内容・エリアが重なるわけだから、指定管理がやるところに入り込んでいき、生田緑地に特化したエンジンをつくるにはどうすれば良いかという風に、今は思っている。窓口になるような会議であれば、皆が具体的にやりたいことを出して行くと思う。理念というものが重要ではあると思うが、あまり引きずられたくないと思っている。そういう風に会議が動けば価値もあるし、皆も期待を持っているから参加しているのではないかと思っている。

(会員) おとしから学生と一緒に、商店街で地域活動を始めたばかりだが、そこで気がついたことは、①今まで地域貢献してこなかったといわれること、②地域を思って活動する魅力的な社会人に多く出会えたこと、③継続的なつながりを持ち、協働するにはお互いの思いを知り、理解して動かなければ継続はできないということである。マネジメント会議も、生田緑地を地域資源として保全・利用するためには、マネジメント会議でどのように管理・運営するかということだと思うが、私のイメージでは、この会議は各利益団体の利害調整の場ではないと考える。市民と行政が協働してこの地域資源を保全・利用しようということなので、生田緑地を良く知る者として、あるいは保全・利用に役立つことを期待されている組織がこの47名のメンバーなのではないか。だとすれば、我々が生田緑地をよく知るものとして、市民に対して説明責任がとれる議論をする場ではないかと思う。生田緑地の課題について良く分からないし、情報の共有も何を共有するのかわからない気がする。活動団体同士がお互いを良く知りあうことが、新しいプロジェクトが生まれたりすることにつながると思う。

(会員) ようやく、4回目で一体感が出てきたような気がする。生田緑地ビギナーからエキスパートまでいるので、軸がぼんやりしていたり議論がかみ合わなかったりもしていたが、大事なことはこれだけのメンバーがいる中で、素敵な生田緑地をみんなで守ろうという共通する思い、一体感だと思う。今、生田緑地が守られているルールをベースにし、新しく参加して来た団体と議論しながら、マイナーチェンジをしていくのが最終的な新しい生田緑地のルール作りにつながっていくのかという風に考えていけば良いのかという印象を受けている。スケジュールでは折り返し地点であり、見方はいろいろあるが、実りのある有意義な場にしたい。

(会員) 多摩区は、駅前に大きなショッピングセンターはないが、水と緑と学びのまちとして、また、自然と大学等知的財産のあるまちとして非常に誇れるところで、多くの区内市外の方に魅力を伝えていきたいと思っている。マネジメント会議のあり方については、地域の視点でということが新たに加わったと思うが、生田緑地の管理・整備・運営で地域の人間がどのように関わっていくのか。このような会議でお互いを尊重し、合意形成していく形で会議が進められれば良いのかと思っている。

(小川コーディネーター) 本日は、頭からいろいろな話があり、深い部分まで問題指摘してくださった方もあり、全員の意見を聞いたことが一番だと思う。今日は、大きく5つくらいのポイントに議論されたかと思う。1つは、これまでの二つの大きな枠組みを解いて、もう少し大きな土俵をつくり、そこに多様な主体が参加し、地域が一体となり、生田緑地の魅力をもう一度発見し、伝えていこうということ。そしてもう一つは、これまでの市民の方が中心となって蓄積してきた経験と知識、共通のナレッジにしていこうという話だと思う。そして、そのナレッジから活動が生まれてくる。それには、ビギナーもエキスパートも同じ知識を共有していったほうが良いということ。それから、もう一つはそのためにも分科会や部会というものを具体的に設けて、展開して行った方がいいのではないかということ。また、多くの知らない市民を招き、担い手の育成の場としてのマネジメント会議ということ。そしてそれらを動かすエンジンというものは誰なのか、何なのか、どういう形なのかということだと思う。

事務連絡（事務局）

閉会

以上